

B-1					
主題	デイサービスとショートステイの連携によるシームレスな支援についての事例研究				
副題	自宅退院後の介護保険サービスの重要性について				
キーワード 1	多職種連携	キーワード 2	介護負担軽減	研究(実践)期間	8ヶ月

法人名・事業所名	社福) 同胞互助会 昭島市高齢者在宅サービスセンター愛全園				
発表者(職種)	中嶋直樹(通所介護副主任)、浅見健児(特養介護主任)				
共同研究(実践)者	鈴木輝美(理学療法士)、岡部玲子(理学療法士)、他				

電話	042-545-8011	FAX	042-545-8012
----	--------------	-----	--------------

事業所紹介	社会福祉法人同胞互助会を母体としています。愛全園(デイ、特養)では、介護の他、診療所併設の医療、栄養、機能訓練、口腔に力を入れた総合的な支援が特徴です。デイでは、通所(総合事業、一般)、地域密着(認知対応型)を提供しています。特別養護老人ホームは、特養、ショートステイ事業を提供。アクティビティ活動が盛んに実施されています。
-------	--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

《1. 研究(実践)前の状況と課題》

サービス提供側の問題として、同一法人で、同じ敷地内に位置しても、機能訓練、脳機能訓練の方法が異なりデイサービス利用者がショートステイを利用した際に運動量などが不足している状態であった。

利用者の問題として、約14年間デイサービスを利用していた利用者が脳梗塞発症により約6ヶ月間の入院を余儀なくされ、退院直後からデイサービスを再開。入院期間は補聴器を外していた為、難聴によって意思疎通が困難であった事から、認知症の疑いもあり、積極的にトイレでの排泄を行う訓練や介護を半年間行われていなかった。その状態のまま自宅退院となった為、継続してオムツが使用されていた。しかし退院後の初めてのデイサービス利用時に理学療法士(以下PTと記載)が、運動麻痺が中程度であり、数回の練習でトイレの移乗が軽介助で可能である事を確認した。さらにご本人がトイレで用を足したいと希望した事から、デイサービス利用時にはトイレ誘導にて排泄を行って頂く事とした。利用開始時から2週間経過した頃より、自宅からデイサービス到着までの送迎時間の座位保持でも疲労感を強く訴え、積極的に活動が行えなくなってきた。その理由として、自宅では食事もベッド上で摂っており、臥床時間が長く、デイサービス利用日の夜間は痛み、倦怠感などで家族への訴えが多くなり、家族の睡眠時間が短縮し疲労困憊の状態であった。悪循環が更なる廃用症候群を進行させていた。

《2. 研究(実践)の目的ならびに仮説》

家族の介護負担度が上がり、身体的ストレスのみならず精神的ストレスが増加している状態では在宅介護を継続していく事が困難であると考えた。そこでショートステイを利用して離床時間の延長を図りながら機能訓練も行い、廃用症候群の是正を行う事で利用者にとって快適な在宅介護を行える事ができると予測した。

《3. 具体的な取り組みの内容》

デイサービスでの介入：退院直後から開始したデイサービスでは、トイレでの排泄を利用者が希望して

いた。しかし下剤の量が多過ぎ下痢が続き、本人が意図しない時に排泄してしまう状況にあった。その様な状態でもオムツを使用せず、トイレでの排泄を継続しつつ、医師に排便コントロールを行ってもらい、介護スタッフが定期的にトイレ誘導を行い、失敗を極力しないような工夫を実施した。次に PT が自宅に訪問し、介助指導および離床の必要性などを説明。その際に介護者の困っている事やストレスに思うことを伺い、関わるスタッフと情報を共有した。そのため機能訓練における運動量は増やさず帰宅前にベッドで臥床する時間を短時間設け、帰宅後の介護者への疲労の訴えが強くないよう配慮した。

ショートステイでの介入：初回到7日間、1カ月後に12日間のショートステイを利用。まずデイサービス利用時と同種類の運動メニューをショートステイでも行えるようにした。具体的には①合計で1日4から6時間の車椅子への乗車を行う。②リカンベントバイクによる有酸素運動を軽負荷から開始し、20分間行えるようになった。③平行棒内立位、歩行練習を行った。次に利用者の現状と介護者の問題点を関わるスタッフが共有しながらデイサービス、ショートステイともにサービスを提供した。具体的には離床時間が短縮し廃用症候群が進行している事、それにより主たる介護者の介護負担度が増加している事を共通の問題とした。更に脳機能への刺激としても重要なコミュニケーションを良好に行う為に補聴器を装着し、コミュニケーションを多くとり、可能な限り集団体操に参加してもらった。

《4. 取り組みの結果》

ショートステイ利用直前とショートステイ後の変化：1日6時間以上の車椅子への乗車が可能になった。疲労感の訴えは消失。デイサービス利用時は、積極的に機能訓練が行えるようになり、疲労感も無く帰宅後も痛みや倦怠感で家族を夜中に起こす事も少なくなった。食事量も増え、体力増加と共に下肢筋力は12.4%の増加を認め、平行棒内歩行は約3倍も歩行が可能となった。介護者の協力を得て、自宅での離床時間は合計7時間可能になった。再度の家庭訪問時には主たる介護者からショートステイのおかげで利用者本人が元気になったと言われ、介護者の介護負担度と精神的ストレスの軽減が図れた事を直接伺った。利用者はデイサービス利用時に会話量が増え、笑顔が多くみられるようになり、意欲も向上した。

《5. 考察、まとめ》

今回紹介したようなショートステイ利用後の効果はあるべき姿だが、福祉分野における医学的情報の欠如や問題点を発見するタイミングおよび一見連携が行えているかのような現行のシステムでは困難な場合が多い。同一法人であっても、人員の問題やシステムの問題からこれまで不十分であった。しかしデイサービスで問題点を見過ごさず、問題と捉えるタイミングを逃さないで、多職種の連携がスムーズに行えたことで、効果発現が最大になったと感じた。人生100年時代を迎え、在宅介護期間が長期となる状況では、介護者の小休止を図りながら利用者をそれまで以上に元気にするショートステイとして機能できるかどうか今後の役割として大きいものと考えられた。

《6. 倫理的配慮に関する事項》

なお、本研究(実践)発表を行うにあたり、ご本人(ご家族)に口頭にて確認をし、本発表以外では使用しないこと、それにより不利益を被ることはないことを説明し、回答をもって同意を得たこととした。

《7. 参考文献》

大山圭子,小平めぐみ:短期入所介護・短期入所療養介護(ショートステイ)における自立支援介護の実態に関する研究,自立支援介護・パワーリハ学,13(1),38-45,2019.

《8. 提案と発信》

普段の様子がよく分かっているデイサービスでの気づきがなければ、ショートステイでの対応も異なったものになっていたと思われる。そして在宅介護を良好に行うためのショートステイの役割として、「元気にできるショートステイ」が重要である。そのためには他職種の連携が必須だが、具体的な問題点とそれを改善させるための具体的な目標を他職種の共通認識をすることが重要であると考えられる。